

大学の視点から ～今後の大学教育へ～

東京学芸大学 教授
森本 康彦

大学側が共通テスト「情報Ⅰ」に求めること

大学教育においても（むしろ、初等中等教育よりも先に）、ICTを活用した学生主体の学びが求められており、それを前提に全学の教育がデザインされるようになりました。今や、授業だけでなく正課内外の諸活動、研究活動においても、情報技術（テクノロジー）を活用し、情報を分析・解釈して、新たな情報に再構築していくための力が必要です。学生は、この資質・能力を入学当初から持ち合わせていることが必須となってきています。

共通テスト「情報Ⅰ」に大学側が求めることは、「大学での学びを通して必要な“情報に関する資質・能力”を有しているかを識別できるか」です。大学に入学してから、情報リテラシーに関するリメディアル教育を実施することはできれば避けたいからです。

情報Ⅰの目標では、「情報に関する科学的な見方・考え方を働かせ、情報技術を活用して問題の発見・解決を行う学習活動を通して、問題の発見・解決に向けて情報と情報技術を適切かつ効果的に活用し、情報社会に主体的に参画するための資質・能力を育成する」とあり、特に、思考力・判断力・表現力等の資質・能力に対応する「(2) 様々な事象を情報とその結び付きとして捉え、問題の発見・解決に向けて情報と情報技術を適切かつ効果的に活用する力を養う」は、大学で専門的・発展的な学びを行う上でとても重要です。

大学入試センターの問題作成方針では、現行の学習指導要領で示されている「情報Ⅰで育成を目指す資質・能力」を重視したものとなるよう作成するとされています。

- ・日常的な事象や社会的な事象と情報との結び付き、情報と情報技術を活用した問題の発見・解決に向けての探究的な活動の過程、及び情報社会と人の関わりを重視する。
- ・社会や身近な生活の中の題材や受験者にとって既知ではないものも含めた資料等に示された事例や事象について、情報社会と人との関わりや情報の科学的な理解を基に考察する力を問う問題などとともに、問題の発見・解決に向けて考察する力を問う問題も含めて検討する。

まさに、大学入試センターの作成方針通りの問題が出題され、受験生が「情報Ⅰで育成を目指す資質・能力」をどれくらい有しているかを識別できれば、大学側から言うことはありません。

共通テスト「情報Ⅰ」の結果

そして結果が出ました。実際の問題は、大学入試センターの方針通り、身近なテーマや授業で扱いやすい題材が多く、実社会との関連性を踏まえた良問ぞろいのテストであったと判断できると思います。

文系・理系に関係なく279,718人が受験しました。これは、理科の各科目よりも多く、数学にせまる人数でした。平均は、69.26点で理想的な点数と言ってもよいでしょう。大学関係者も納得というところだと思います。

識別力に関しては、現段階では正確な分析はできませんが、巷のネット上などの反応から私なりに判断しますと、「情報Ⅰで育成を目指す資質・能力」をよく有している人には、事実に知識を問う設問が少なく、思考力を発揮しその場で試行錯誤して問題を解決していく設問が多いため、テストとしては易しく感じた傾向があるように思います。一方、各設問は情報技術や情報システムなどの情報の扱いについての常識を踏まえた上で適当なものを選択し解答することが求められるため、そうでない人にとっては、その設問が問うていること自体を把握することが難しく、あたかも読解力を問う設問かのように見えてしまった人も多くいたように感じています。実際、受験生の中には、「(暗記の詰め込みの) 勉強はあまりしなか

ったけどできた」,「時間が足りなかったけど易しく感じた」という生徒がいる一方,「難しかった」,「何を聞かれているのかよくわからなかった」という生徒も多くいるようでした。また,実際に問題を見た大人の反応では,「良い問題だ」,「簡単だった」などの意見がある一方で,「やってみただけでできなかった」,「高校でこれを理解した新入社員が入って来るようになるのか…」など,驚きを隠せないというようなコメントも見られました。これらからだけでも「情報Ⅰで育成を目指す資質・能力」を有しているか否かが判るテストであったと推測することができると思います。

多くの大学は,共通テスト「情報Ⅰ」の出題された問題とその結果から,安心してこのテストを受け入れることができるようになったと思います。今年度は,情報Ⅰの配点比率を高くしている大学もある一方,配点比率を低く設定したり,配点をしなかったりした大学も多くありました。おそらく新しく始まった情報Ⅰのテストについて不安の声があったことを考慮しての判断だったと思います。しかし,今回の結果を受け,来年度以降は配点比率を上げる大学が多くなっていくと予想されます。

これからの大学教育

共通テストに情報Ⅰが加わり,高校生が情報Ⅰをしっかり学んでくことで(小・中学校からのICTを活用した情報教育の広がりも含めて),大学に入学してくる新入生の情報リテラシーが大きく向上すると思われます。これを機に,大学にも大きな変化が起こると考えられます。

(1) 情報教育の高度化

初年次の情報教育が高度化されます。現在まで多くの大学で行われてきた初年次の情報教育は,情報機器やアプリケーションの操作習得に留まっている授業も未だに存在しており,早急な授業の内容とその方法も含めた改善が必要になります。

(2) カリキュラムの変化

情報Ⅰ(情報Ⅱも)を学んできた学生を前提とした4年間を通したカリキュラムの設計と,それ

を実施できる環境整備が求められます。いわゆる文系学部・学科でも情報科学やデータサイエンスの基礎・応用を学ぶ授業を必修化するなど,全学的に情報教育を充実させることが考えられます。現在,国レベルで,AI・データ活用教育を強化し,情報Ⅰで学んだデータを活用する力を発展させ,社会で即戦力となるデータ活用人材を育成することが求められています。

(3) 入試方法の変化

共通テスト「情報Ⅰ」の点数を活用する大学・学部が増えると共に,個別入試で共通教科「情報」を取り入れる大学が増えていくと考えられます。これは,一般選抜だけでなく,総合型選抜や学校推薦型選抜においても同様の傾向が見られるようになると思われます。

(4) 情報技術を活用した学びの変化

データサイエンスやAI活用が広がり,学生の学び方や研究の方法の変化が急速に進みます。文系・理系の境目はなくなり,情報技術を活用する学問,研究が進展していくと考えられます。特に,高等学校までの探究的な学びを通して培った情報活用能力を最大限に活かして,学生が主体となり,高度なレベルで課題解決型学習(PBL)が可能になると考えられます。例えば,企業・自治体と連携して,協働でプロジェクトを動かしたり,学術的な研究を行ったりすることもできるようになるでしょう。

さいごに

今回,共通テストに情報Ⅰが新しく追加されたことで,共通教科「情報」が主要教科の仲間入りをしたと言えるでしょう。これを機に,情報教育は大きく舵を切り,発展期に入っていくことになると思います。文系・理系に関係なく,高等学校で情報Ⅰ,情報Ⅱをしっかり学んだ生徒がその力を発揮し,大学でさらに高度な情報教育を受け,専門的な学問を学び,自分自身の未来を切り拓いていくことができる,そんな大学へと変わっていくこととなります。